

伊達家が育んだ文化を学ぶ

歴史と文化を学び、それを建築に生かしていきたい。

取材／ASJ 静賀正樹 撮影／上田宏



精神を集中して 静寂の中で香りを愉しむ

香道。聞いたことはあっても、実際に体験したことのある人は少ないかもしれない。

文字通り香りを愉しむことを基本とした芸道で、茶道や華道と同じように所作の中に精神的なものを求めるものだという。

鈴木弘二さんは、仙台に事務所を構える建築家。



「特に香道に強い興味があつたわけではないんです。仙台には『伊達文化創世フォーラム』という集まりがあります。伊達一八代当主の伊達泰宗を総裁とし、仙台・伊達家が育んだ文化を学ぼうという集まりです。その中で陶芸や歌、お茶やお花を習っていきまして、そのうちのひとつが香道なんです。ほかにも変わったところでは『鍛錬』というのがあります。湯殿山で断食をしたりというのもあるんです」と鈴木さん。

まずは一通りやってみよう。「まず、香炉の中の灰をかきあげます。そしてきれいな円錐状になるようにするのが、これがなかなか難しいんです。灰手前といまして、上級者はあつという間につくってしまふのですが、私くらいのレベルだとなかなかできません。」



神を集中しなくてはできないらしい。

灰の中には香炭団が埋けられており、香炭団は円錐の中に完全に隠れてしまふ。灰押という道具で円錐をよりきれいに整えていくのだが、これも力が強すぎると灰が堅く縮まってしまうという。

円錐に整えられた灰の表面に「聞筋」といって筋を一本入れ、次に中心に香炭団に向かって垂直に火箸を刺し「火窓」が開けられる。

そして香木を載せるための「銀葉（厚さ〇・五ミリほどの雲母の板）」を置き、香りが立つてくるのを待つ。

ここまでおよそ一五分。

「灰手前は精神修養みたいなものです。それをちゃんとやればいい香りでご褒美として手に入る」と笑う。

香道では「香り」を「嗅ぐ」といわず「聞く」という。香道というとは何種類かの香木の香りを聞き当てる「組香」という印象が強かったのだが、

「たしかに香道というと組香というイメージがあるでしょうが、一番大事なのは日常を離れたところで精神を集中して静寂の中で香りを愉しむことなんです。いろいろな所作に決められたルールがありますが、普段家でちよつとだけ精神を集中して香りを愉しむのがいいんじゃないでしょうか。ですから、和室で着物を着てというスタイルでなくても、洋間のテーブルでやってもいいと思うんです」という。

ために香りを聞かせていただいた。アロマテラピーのような香りを想像していたのだが、まったく違う。油断しているとすぐにわからなくなってしまうほどのかすかな香りだ。

「伊達文化創世フォーラムを通して、歴史と文化を学んでいます。それを建築にも生かしていきたいと思っています」と鈴木さん。地域に根ざした建築家らしい言葉だった。

① 香りを「聞く」鈴木さん。一定の作法に則って香りを聞くことを「聞香」（もんこう）という。香道では香りは「量」ではなく「質」が重要であるとされている。またこれらの香りは「甘、酸、辛、苦、鹹」の五味で表現される。

② 聞香のための道具類。銀葉挟（ぎんようばさみ）、香筋（きょうじ）、香匙（こうさじ）、灰押（はいおさえ、はいおし）など。左手の器の中に香木が入れられている。

③ 灰手前。灰をよくかきまぜる。

④ 灰押で灰の形を整える。

⑤ 銀葉の上に香木が載せられる。香木は低温で温められることによって香りが立つ。線香などのように煙が出るわけではない。

⑥ 鈴木さんがつくった仙台の伝統的な堤焼きの器。

鈴木弘二

（宮城県仙台市）

1961年宮城県生まれ／1983年日本大学理工学部建築学科卒業／1985年日本大学大学院建築学科修士課程修了／1985年黒沢隆研究室研究生／1986年鈴木弘人設計事務所入所／2005年～鈴木弘人設計事務所代表取締役

本誌 p.11 に鈴木弘二さんの設計された「会津の家」が掲載されています。あわせてご覧ください。